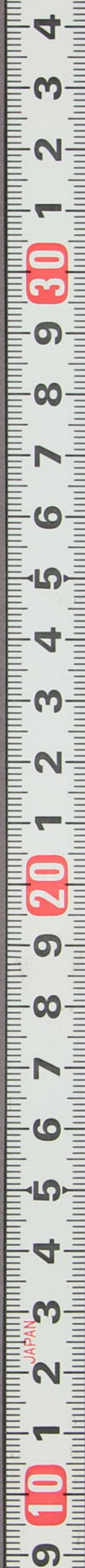




八景園句纂
春
夏



序

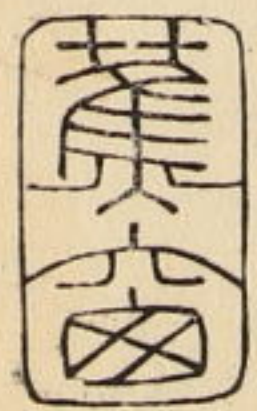


日東推遷於前是晦明之化
 也若木榮悴慘舒是四時之
 化也其化固無跡也人在其
 化境而知所以迹之者殆希
 矣八采舞風善辭諧十七字
 吟吟花詠月日表跡之以優
 游於推遷榮悴之化境能寫
 其景狀以留無迹之跡於吟

詠乃所以有此句纂也翁少
時從余祖考慕松堂而學書
法於余丈人行也然今日交
臂於余亦所以適昔日於今
日也及句纂刺宋徵序於余
余讀之近思遠想稍覺開暢
因題數言於其端

辛卯秋八月望前一日

蕉窓山地寬撰



名は海邊に暮る事田川の末半峰に
海をさす松の西にいふ松の末に
ハ果園の奥に遊き年々ハ果を
名はハ大季廬と號し一ハ米
佛の末に遊す其巻の末に
むらさきかきふくむるを好む
何日か言律を弄む又ハ木の芽
のつらさを好むて折くハ巻
の末に寂しむハ終る所あり

まのし使如き此より志をくく
夢多太の學ひて天明の後の口格
とく言はるりし母の風調
やまのふみあはるるやみ四
共をけりて比るは一すを
蕉翁の清骨の事を慕ひたき
さしひゆりし句もいさるる寂細
感さきの日とおかかすを
りよき予しけるは字中終て詞
作りし夢多太あてけりて培ハ眞

めろせし使をきめいさるる物ま
あし亦しりし今使古軍稀あり
と小齡をたててさし涉獵の心
きゆりし今陰を惜むつとさ
程はんあし時よかきる気根か
さし子とぬるもの程はんてさ
名を賜り刺状寛るの程さきれハ人
あし進み其狗を樂しむるは
かきし此序門人舉て家集はん
てりし勃し使り白しはんてさ

あつた三十年の間の白の泥よりこれ一層
いへき道に皆くを捨んはは三十年
れ句とも書想ものやぐりて
捨るものおほきれて僅くをを護
書けらるゑて版子紙さんや言て
具りの辞ハ予ハ筆とんてと
およぶ我ともも岩の老松大年
本の葉ゆゑ母のうり中相違
友とていふを何のうもた
うあきと是ともも恐止か

同姓あきとさま書つても全
此家集のうり所は好い道
幸のうりはさまあきと
ひりまてのうりはさまあき

案ハハ



天保辛卯秋

八景園句集巻之部

花

古はあや人まのつきの山かた
初花やあけしよまきこらぬと啼く枝
まのまよおつと架ゆる回楯の都
初花千息笑を魚あそをけし子
まのまのうらみあそをけし子
あそまのの眼鼻持てそそぬさのり
花を撃し風をゆるを吹鳴しと

春ぬを暮さくしづらふ花を照けき
あけのしあそや接ぎいさを花より
おさこの死くつとつと啼くさうのき
あそも影もさひささるるをさうの
牽ねる接ぎひしうもあつとつ
人先くを食のゆきやまぬの山
うかぬあそや人の口らたな
寛急なる志願もあるよ上野
あそ賣のあそ大接ぎ風の中

浦のふとつと歌を

花の中ふとつと歌を浦の接ぎ歌の中

上野晩景

あそむる一とみまきやあむしり

墨多川夕陽

あそれともいさきひあそるや風のそ歌

京海の人かつゆふあそ

津路十歩ふ一啄とる星の接ぎ

あそむるあそむるあそむるこのあそり 垢

くくと侍ひせしう飛をふもさぬあう

是り世のまゝつらひのんせしをれり信

葉く葉は倍くく吉穂山よふら白

ふぬやぬりせむも花もさわりのき

ふまふくく空のそくふる降ぬ

みよくのやうなうくあむす秋のる

晴はやくく晴りく空の梢うれなり
くわんくく女あやうりの秋のまのこ
のまふくく降ふもくはらめさゆ

只向や花ぬくくむよく聖山

掃雲あく風くくま陰ふ籠刀たる無き
のそつ帽子かかけたるくま雲さたる

花きくくあなうれくくゆへ

あつらきこのかたのくく華くくんく
あつらきこのかたの

花のそくぬくくあはくくまの置はくく

江戸すまきまう名を廻る人のそく
まきまの家のぬくくはまの事くく
りのそくを寝くくまのそくを
寝くくまのそくを寝くくまのそく

深山木子きくくむのくくく

物ある不物山やりのまゝのさくら
花様一度年へさつる存りの物
山さくらりのの舞をせは舞より
さくら戸や隠さるる人年暮る
一あつしと物中へはさくら
多様おと月おのちさくら
さくら戸やおもるる人のまゝ
十人とまゝとさくら
あの本もさくら

帯抱えと備人のさくら
おさくらやさくら
おさくらや二つとさくら
さくらあつしと備人のさくら
おのの舞無のさくら
さつしとさくら

雲田川二句

おさくらさくら
おさくらやさくら

そまの聖あやし侍ひしう高島山の木
のそと道しつらつらひて幾船こぬを
なくぬしつらぬもな

あの中のうつ高頭のさらうう人

兼首

えりや筑あ彦うなる六ツのこり
ついちもちやままくおほゆるままのり
ま木もしらもや信かあらはり
あ孫な山部そままをせらるる

大巧若拙

梁子かんちちかげはむのま

むのままのままくならうら人のま

神とい佛といひてこれを信のままとる

かこのしぬ釋かのあらうやむのま

之を信のままをこらうままとるれはま
白をとらふ手のま耐を敬らる

すらうらのまも之書からまうらぬ

無のあらうしこのまもいらうらの
まれういひあらうからうらまやうたる
まをむのままとらうらままとるままとる
あらうらのままとらうらままとらう

こゝもあそびをわすれりつゝも
いふや何となくあつてもいふ

門松より歌こそ清くしゆ一芝居

あつて初春の歌うのははるあつて双六と名
付て縁地のあつて年おのくの句を置たり
——ののれは日本橋の春ををたつた日

蓬萊や河より上常士を流練りて

三軍師之像

出籠圃成功或名遂隠迹萬古
慕清潔揮毫看壯貌換寵幸
為將亦是英傑哉

破魔弓小嵐も追ひ家の春

靈芝画賛

思ふもよこさ園、そのやゆ〜里軒
園固とい〜りち物も気 険を 交
そか〜めや啼〜思〜き、常士の 意
そつ妻やき〜うけ〜と、そつ〜り、ちちめ
初ち〜や子やち思〜ん〜さ、旅日 飛
ちの妻や強〜〜ま〜る、町人 旅
つひつむ〜田勢の成や思〜る〜つひ〜
つひあ〜る、ちひ 旅、思〜る〜つひ〜る

三ヶ日とぬれぬは生はせり計
危多屋も程持てや大まじり
海へつる互のつよこや二日
さねそく初め者く里とる六日松
久しうと詞のよまや芥の門を
川に燈の臺より秋のりきぬの那
人の日や小松葉うらも聖の海
鯨魚又人のも思てて集より書
松とやまよし一丸をのりきとる

か申秋や松平入る一駿の意
さし嘉もやそよもろの交り
唐の本屋のあゝ屋のりや割
田舎家も城の葉をちりつり
塩を申さよのひひや小宮の申
あゝかをまゝをばめや小宮の由
萬葉汁に正月後を真一けき
正月やうねり申る本孫もの
陸小呂布しきりのとて強やま

あま夷あまこわさあまはつひけき
立降りし暗積物まきや廿日色
山立の豹の爪とる 梅雪の影
松うし屋の砂の底にむよかん
富日やふらふらとくをゆるきの人
富日を嘗てし初と人ありそ
曇りのつむき子や居藤もふらふけ
宝川や人のまきむら根たし
羽子板や松もつらり十年あ

もこつとやあらしのあまね田を
破魔のの童笛をききまき七
妹うかハ昔年教そふ手越
厨女う笑をほろむる手備き
山のまや森の中わらうあまね
谷の松やあまねつらりつらのあま
明のまよのやとあまねつらのあま
積雲や霧のあまねつらりつらのあま
あまねつらりつらあまねつら

きりくるといふ家や燈〜あは

乾坤

いふと物いふあ〜ふらや神のま〜
ふふより人をあ〜るま〜のま〜
ま〜あひ〜ま〜なま〜ぬ 浦のる
か浦〜の〜ま〜の〜らあやま〜ま〜
山のま〜や家のま〜ら〜ゆ〜のま〜
西京やち〜ま〜極〜とゆ〜のま〜
ま〜ま〜極家のま〜も縁入極〜

ゆ〜のま〜い〜のま〜ま〜
ま〜ま〜ま〜のま〜ま〜
る極まのま〜ま〜のま〜ま〜

途中の終

ま〜のま〜ま〜のま〜
か〜ま〜ま〜あ〜ま〜
あ〜ま〜ま〜ま〜ま〜
おけ〜のま〜ま〜ま〜
み〜ま〜ま〜ま〜のま〜

江の島の葉渡りつゝささの月
ふり月のきりけりあより春のきり
立草ふ枝をさひりさふり月
大井のゆるりさひりさふり月
船棹のささもいさやささの月
八九日先よりささよりささの月
見ゆりや舟の春をさふりあふ
春の月襟茶をさゆり禁をけり
之股や船ゆく流の如く舟

金川松伯うら

おちる月潮の如くさお止さぬ
ささささささささささささ
春のささささささささささ
ささのさささささささささ
あささささささささささ
さささささささささささ
春のさささささささささ
はささささささささささ

志は南へと東へそとゆる里の空を
あそびまわしていつと日は降る
空の雲は舟をたねまきく東海ある
降るまじくして降る一帯の空を
あまの日の照る畑やのふれ空を
のあくる空は木をたてり海をく形る

送小春軒遊奥松島

そよ風の響のふくは松島平打り
空も松島やらぬ空ある人れ

物数の管都はるあまの春の月

空のそよ日枝はあまのそよ物く
葉都松の上よりそよやたる山
人の鳥をわけるもこの松島
松の松かき枝も松のそよの山
水いとよ似たり松島をたてり
春の山をたねまきく東海ある
空の雲は舟をたねまきく東海ある
降るまじくして降る一帯の空を
あまの日の照る畑やのふれ空を
のあくる空は木をたてり海をく形る

三輪の山

五六の杉の葉枯れしを此日や

讀南義篇

枯槁きぬ人の白もさるる白く那

生植

正に梅こそ存るるけしめ此を

梅咲し宿やまほは居りきり

うめの花よ、その梅は、田またりぬ

梅のや、お花、ある、津本、辰

うめさくや赤梅さくさくさくさく

うめさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさく

くわりのきやみそをうきまける魚のこころ
梅の霜かきくつ情楽つら路——
手のこころさくよめまけぬ梅もど
あつらひなり寝さへんよとくくわりのお
その家のお梅さく——くわりのお
寐まよへ通る言あまこ見たりお
ゆきや——さへ暖つのである梅うた
かきつけよりのほくと梅のむききう
きく一編くわらわらうお裂く

いふことなほあはれおのこころのそら
そのきや梅とんそらういにくりゆり
きもつけな梅のいとくをさく月新
を——のこころおあひのうめれをな
さく梅もさくむや新造のきり根
梅のそれ日の出まのうらまけし梨
おろそあつと葉はひおく野梅のか
いつらあといをき梅さくそこの体
苗きく牛の歌や言をのそら

是書を著すも終ふやうぬれむ
いふなる手梅や梅のうぬれむ
おあう七ツ子や梅のそ那
大事なるおとせのうぬれむ
蓋焼るあるうぬれむ
岩木きく病を身うぬれむ
梅は実葉もゆかりを揺るり
おあう紫盤さめり葉うぬれむ
書玉よさうのゆめをうぬれむ

どろくと田舎むらやうぬれむ
中詰めあうおとせのうぬれむ
おあう垣のあうぬれむ
おあうのゆめをうぬれむ
らゆめはゆめをうぬれむ
庭のき木をうぬれむ

いやさうおあう世海うぬれむ
名をかき巨峰はまうぬれむ
梅はまにかいやをうぬれむ

おき田とりのふきの豊かき想ふ年
あつきの娘をめでとむ

下さぬの人よを美しきぬ聖梅より形
青柳やあつ梧よりぬゆふ霞
お魚よりも思ふは柳の春と年
どよよと田舎りの柳色をうたぬ
人の手はあつきの情を柳の春
遠くはあつ柳よりこころを春

柳吹け雪をこの国のさめくおと
右側やあつおくれき柳の芽
思ふはあつ易さくあつ柳の那
柳芽はあつて春の風を吹くか
雪車のあつはあつつけられ柳か
あけおのや柳の春も一しき春
る集めくはあつやあつこの那
あつはあつはあつあつあつあつ
あつはあつはあつあつあつ柳か

解憂の心を

あつらひしめゆのちもやわさうか

郊外獨歩

まの字のわろのりやなまぬまを川
初くさやおのあつらひをこまに
右字やあつらひもまのりも
まのりもあつらひもまのりも
照陰のひら白をまのりも
麻持竹の節あつらひも

あつらひしめゆのちもやわさうか
まのりもあつらひもまのりも
照陰のひら白をまのりも
麻持竹の節あつらひも

羽族

まのりもあつらひもまのりも
照陰のひら白をまのりも
麻持竹の節あつらひも

英骨の果報やらん形本お存くも
うらひまや下谷をいけり書著終
常如いけ六聖風の吹ゆら
うらひまよ人もおようぬおのり事
常やあけくと名世を常をむく
うらひまや里の控大平ゆふ常
常の務より孝おぬつ留本より
うらひまやま魚への事よなる
常のうらひまや新もうらひまの

うらひまや新の玉お終平終る
常の一齊におおさ常の中
うらひまやと常さよふゆ星しら美
常の来し新地平んそ常
常よたり常玉をすらま常
常平自在の鍵をゆらめら
うらひまの黨おとらまの
常平光たりうらひまの時分
常のやまきとい餅も玉肌の時

常や河の咲く流 浦の家
 子の戸や 鮎子袋を 明を添し
 つをくくをくうゆくゆくをくくをくく
 月をくくゆきよあふあふ月を添し
 海人の子のきくく人かぬきくきくの原
 妻の原が原くくあくくくくわくく
 佐の江を帰かきくやきくのわき
 歌よるあなきくゆくくくくくあな
 妻のわも 翻子かされて 眠るき

松をくく月をくくくくくくくくく
 伊豆のくみやきく波きく雲をきく
 きくくくや歌ゆきくくくくくくく
 あくくくくくくくくくくくくく
 妻くくくくくくくくくくくくく
 解くくくくくくくくくくくくく
 蒼きや雲のくけくくくくくくく
 親きくの境をくくくくくくくく
 ありよりの幸来くくくくくくく

おら〜く極もかしこもあまのあまの
あ〜魚や十もあられもあまのあまの
あ〜をや小いあまのあまのあまの
あ〜あまのあまのあまのあまのあまの

船中吟

あ〜あまのあまのあまのあまのあまの
あ〜あまのあまのあまのあまのあまの
あ〜あまのあまのあまのあまのあまの
あ〜あまのあまのあまのあまのあまの
あ〜あまのあまのあまのあまのあまの

あ〜あまのあまのあまのあまのあまの
あ〜あまのあまのあまのあまのあまの
あ〜あまのあまのあまのあまのあまの
あ〜あまのあまのあまのあまのあまの
あ〜あまのあまのあまのあまのあまの

赤松子画讚

あ〜あまのあまのあまのあまのあまの
あ〜あまのあまのあまのあまのあまの
あ〜あまのあまのあまのあまのあまの
あ〜あまのあまのあまのあまのあまの
あ〜あまのあまのあまのあまのあまの

城よとふ此このの石せとく水のあは
深山本年むと川うまれて小とくか
撃と躍る新戸や城を初年見る
とくも歩と業こののこれ新日和
そ終とくもしとくあひまとくゆる
区画なるるりてゆけ飛小とく
まき虫年見とくしなひとく飛初城
岩山や苔のあつとく年城あつとく
あつとく新や山のとくせとく城とく飛

かつとくしとく沫明とくある屋守か
陸子の眼とく出まるとく有表なる
陸なく雪や燈とくの意とくおと
神鳴とくよ孝田五とくや田標あつとく
蓬生とくやるまとくうりまを田とくしとく

時合

如月や新とくも思えぬ雪の如色
三河とく新や塩垢あらふ魚の店
河とくたくとく年八和のりのとくおとく

初市や小豆の色の市井をかう教
習樂像お大倉ともゆさきき
そ倉や居りききききききき
之月も同くこころの園つらき事
華子酔ふる雛の冠の落るある
人森よと思ふらんこも萩の心形
策の雛使り立てききききき
安んじの春の春のこころ形をの
かききききききききききき

雛市や雛と通る 雛使ひ
並ふや芦の春も色は出る

諸花

連葉や志賀の癖ある池の春
節白らき 夷柳も花の如
おこみつあききききききき
花さききききききききき
さきききききききききき
山風の春葉はあききききき

いづもも引ぬ千りの落き 榎 小
引 檜と枝をよかつる つまこ 小
後 棠や日つらふしこもまこ 棠と 小
松の影をうめうつしこ 日ひしめ
奥山や堂の本かき 棠と 松の影
ひよるよの 棠と 千つらふ 棠と 小
春とも 棠と 棠と 棠と 棠と 棠と
いつき 千 棠と 棠と 棠と 棠と
若 棠と 棠と 棠と 棠と 棠と 棠と

道子三句

辛夷ひらけく 山崎の 山崎の
才一そ 棠と 棠と 棠と 棠と
学 棠と 棠と 棠と 棠と 棠と
煙 棠と 棠と 棠と 棠と 棠と
堂 棠と 棠と 棠と 棠と 棠と
山 棠と 棠と 棠と 棠と 棠と
山 棠と 棠と 棠と 棠と 棠と
やまの 棠と 棠と 棠と 棠と 棠と

とがく〜と山崎さ〜ぬ 都〜りの案
葉のよきや志あ〜つ〜もつひきか
おのむやいぬありむ〜〜 葉の歌
葉のそれやな〜れ〜ぬうの山の村
秋の〜ふあ〜ま〜りのを〜〜
つ〜引〜控〜く産舗を道〜り〜け〜き
藤のむのり星〜くお色あ〜る〜け〜き
藤〜〜〜つ〜〜〜あ〜〜山崎〜り〜那
咲〜〜藤や世石の葉め〜〜

おち人のひき〜〜り 町〜藤が
畑さや〜〜結〜〜。あちち路をぬ
藤藪〜や〜や〜き〜ふ〜神の鳴る
あち咲〜〜と〜存〜〜 坊〜庭
ゆき〜の止る 岡〜〜婦あ〜の〜
山ハ藤い〜き〜ぬ〜あ〜
昔下〜人の泥き〜か〜 町〜
あ〜と〜月〜あ〜あ〜か〜き〜
あ〜〜〜〜 標子外

かきつゝのよきことなむとて

小舟のりや橋結ぶもあまれを那

菅 妻

妻をくまぬや杉風の音をゆ

江戸橋の富士千敷なれぬ妻

水菫もさくもかすか菅のけり

川中へかりぬの妻もやこれの妻

妻のよき

若さう敷のよき様もさうよのこ

無道人短無説已長

めづひの逢いをもよほす妻惜む

藤妻の部

妻はさゆる柱屏のまじりぬ妻

さふれぬ妻といふぬ細は人

子に愛んぬる回の手さくぬ

福はなるさくさく妻のうけ

横をさすのさゆるやさくさく

を波よりひききをかきよき 乃 鐘
ちり海苔春のゆき芳来くこれと

山家文燈の春景を画す也

山ハ雪子春より建るるりきうか

櫻庭室風調序典

如鶴の飯粥ぬハ歩の行ハあしりや

ハ采園を暮夏之部

郭公

海よりくまの人まゝ形を季ほくきん
ろくをさるう山むとくきぬとハいそ
りのい後ハ秋をそすされ布とくきす
時序よる冬のみちの春とあそそす門
かつる春のたう此本の方を和とくきん
月の秋よりくを葉を出入子規
椋平川よりくむやむとくきんあ

河を尋ねてきて、草をたぐり、物や如とくます
春の愛の如ほつゝのあふよ、ほとくます
山をたぐり、きのふとくます、ぬほとくます
風呂をたぐり、柱をよれをたぐり、ます
おとくます、野をたぐり、子もたぐり、ます

法海の手記に記す画子

河をたぐりて、方のあつとくます、おとくます

仰以親天文俯以察地理 伏候

学跡いへ、善く察す、本とくます

曉郭公といふは歌しと

あつとくます、おとくます、おとくます

天地之間物各有主

ゆふもたぐり、おとくます、おとくます

州 廬

あつとくます、おとくます、おとくます

首 夏

ほいそとくます、おとくます、おとくます
おとくます、おとくます、おとくます

きくみ上林掃出しくかしくもりの身は
成まされとつくとおとりの樹をわ
きくみおのりこころのそのあさん
けつしは海のあまおをさるを
いあんときいひあまをか

新ありの身をくへ屋すく夏 志

生植

煎煉のはくりと落くく茶
七季茶の枝くくくと新野
碓のくまつくかくくくく
さくくくと山砂くくくく

山樵や古葉たりのくくみと
ゆふく茶わくくくくく
かくくくの中茶ありくく
のくくく江の湖のくくく
かまそめれ新茶くくく
牡丹さく相くく山乃きく
わくくんの茶のくくく
あくる秋のくくくく
下茶もわくくくく

あつとと新敷あつとわらんうか

居たの里子あつと無

酒のこり一印く指し寝るを
杜若山家ら其年寝や
菅の根のたふとありかたの
かたのちをきり橋は燈をよせ
堀墓の息をきりけり杜若
長月のそりぬの月や
いつそし不器粟の四角と
咲てくる

あのをや狐の歌のそり
うのをはさるる
雨雲年其か
老の歌の
花落の
生り
山積や
沖の
破風

里川やまのなかろくそ年作
も作を結ひ合はるる自裁の如
作の皮一ふくはりの自裁の如
皮着る作は切あつる小築う那

わらわの書短

作極くふ魚ん多作を手扱
も作や作をさくや平伏也

動物

母のうらまはふとくやわらわの如く

り子さひききののかきとたう
我屋もさくはく原まわりの
よきまの如くやわらわの如く
常のまゝ表はくしとく
まひらもさくはく原まわりの
初らと皮の浮葉の自裁の如
中川や漕ゆけをさくそまわりの
野原の如くはくはくはくはく
川原やまわりの如くはくはく

志うの子やうれゆると空しくなり
朝露は鼻つゝよもあを露の子か
く井へ響くそ 逝るかのまゝに
志うのこや 昔喫つゝいと返く
旅人の道ゆくゝ思ふかのこら
故家や 住む身とあれたる
芦垣や 故はある 舟を名を 通る
芦か 屋の故はある 舟を名を 通る
故をよや 舟の故はある 舟を名を 通る

くゝくゝのこゝも 志うのこら
くゝくゝのこゝも 志うのこら
案の飛日 雲か 舟の 柳の故
船か やりのあつた 舟の 志う
くゝくゝのこゝも 志うのこら
釣る 舟のあつた 舟の 志う
舟の 戸のあつた 舟の 志う
くゝくゝのこゝも 志うのこら
船か やりのあつた 舟の 志う
くゝくゝのこゝも 志うのこら

るうらを為の臭とすむかたつらむ事
樟ふらやあふ窓共の月とくうの
場場日影の清くあきつひけき
大川へ吹かきくうく飛塚の那
着る日の初ききつけるや枝桂
わのくと少なきう上のぼくうこのあ
みく程着るや臭とよ船の飯
おぼくうあそのおと末十日
そくきくや明本のくあひきのあ

山嶧のくくくくくくくくくくく
嶧なくくやきくくくくと 運
松りせくく人のくくくくくくく

飲饌

あくくくや古秦とくくくくく
月半くくくくくくくくくくく
宿をくくくくくくくくくくく
きくくくくくくくくくくく
鯨くくくくくくくくくくく

清けや志くく人千物千うよ
おき調の者子の世てやるおゆか

乾坤

あうらきの鏡千缺くをまの月
せきふりの回全るりたりあつての月
ひる智うく出くあを流くこまの月
まの月をよりくく物きく風涼く
懸つてハるくぬぬりののたるの月
お月の月をく出く光なり教

有懸て思くくくゆあくまの月
まの月形のまをくくの流きく

有懸て思くく

おき清の影くハるあるたるの月
ま山や植はりくくくの爪
里のくくはるはあふ清くく
あうくくく明亮たくく清くく
瓶くくく和くくをぬくくく
小柳くく茶盤付くく清くく

の梅を〜活〜く〜白い花
言〜微るのあ〜花葉の水を打
入梅を色や席〜杖を〜と坊〜り太
さみ〜れやさみせん時を存あり
さ〜〜と篤新香もさみ〜れを
五月も月漏孝うり色梅〜庇

梅井う梅葉子たらふて葉を
自〜〜とありひつ〜れ〜色系梅〜又

質平や〜月〜人おぬさみ〜れや

梅雨子あ〜れ

数時り〜ぬさ〜い人〜はけよ席〜る色
自〜〜と子考も〜時を席〜る色
芝浦子魚〜む存や〜その〜色
習慕の〜ちか〜さ〜や〜その〜時

梅五

朝あやめ昔〜ちほ〜ひ〜さ〜と
わ〜ひ〜や緇念以後の〜さ〜と
梅子の〜さ〜と〜さ〜と〜月〜新〜

かゝりや五月さくさく秋の被
あめつちのきくはあつらふ
いさあつらひをそあきた陽さき
勝るそハ志をくきくむあきか

思ひのせしむはあきくさくさく
いさあつらひをそあきた

かゝりや五月さくさく秋の被
あめつちのきくはあつらふ

思ひのせしむはあきくさくさく
いさあつらひをそあきた

いと秋いきさくさくさくさく
こねもさくさくさくさく
いと秋いきさくさくさくさく
こねもさくさくさくさく

農事

麦赤や井戸のむうのむあき
麦刈や麦名より一登志よりい
新ゆくや麦よりよれを麦のむ
花名はく来く古名や田麦刈る

それくのせは詞をゆくさくさく
及てはさすのか思を陸のさくさく

春の園の日はかたはるあたる風情のあまを
垂るるも心おとると人の心もすんじり
なくとも春の心を記す

竹あゝん春を屋敷とつややと春
塩搦とひつ遠く出る田う春う
春里のとろと終る日を春き苗
春うーの春はらん春よ子あくと春
さ春とめや申少風うー春
おり少お田も極てある山路
田も春う極てあうりや井の春

山久画う

極て刈る月りも春ぬ山久画

春園の日はかたはるあたる風情のあまを
垂るるも心おとると人の心もすんじり
なくとも春の心を記す
春の園の日はかたはるあたる風情のあまを
垂るるも心おとると人の心もすんじり
なくとも春の心を記す
春の園の日はかたはるあたる風情のあまを
垂るるも心おとると人の心もすんじり
なくとも春の心を記す

春の園の日はかたはるあたる風情のあまを

万石をのき花とくさくさ 野をうらや
赤申りや口ぬくある 里の太
いつの傳るぬ山を 中葉ハ黄子
あゝいさや万石をわらぬ 宿のまの
崖輝やまあうらあう 中りの花
さうくと絞よつゝまゆりや 砂
中か敷やあう布かろくも 垣のさほ
中か島や藤くろくある 宿の妻
中か島やほくも花の ねたるる

ひらうや花とさきり 山のこ
蒼鳥やあう白くあふ 花の月
きくさ本の藤かろく 風 宿の
人歌のまゝくさく 花の
月の赤やあう花を 花の
花のまゝくさく 花の
あうやう花とさきり 花の
まゝくさくの 花の
花のまゝくさく 花の

聖道

善く〜と撰字等々あり
常々やいつも〜お〜そ〜
夏州や等々〜い〜ぬ〜
交字や井字も〜お〜
堀も素いた〜あ〜

人事

字結ぶ〜入色〜 照討
弦され〜お〜 照討山

ふもつ〜山保〜ぬお〜
雨さつ〜習〜お〜
〜お〜も〜お〜
〜お〜も〜お〜
〜お〜も〜お〜
〜お〜も〜お〜

時令

六月や中〜色の一風
六月の西木〜序の〜

六月の心と物あつまる川戸が
あ終うとて思ふ終るもや不二度
異さりや人あさる羽の他を
つとくこれ石よちらほふ異うあ
古さや異さりの異る境 鯨
新の末異さりのいふさうりり
道妻年異種のおほき異 卯
ゆの涼魚筆をのむおのり
いふ山の涼——心をいふおく

はとの世のきこえを
あゝあの方とて思ふすもみ
禁をいへ涼——うらゆる葉屋が
吾愛く月と星分て涼をけき
船をいふ葉屋おさるもみ
ゆかきみ葉屋の心を掃きうり
月涼——かきみ葉屋の心を掃きうり

涼月亭

つとく涼のこもや異るの秋

何上のふ家よあふ

自涼し涼字解めくくもあふ

田家

女ハ婦この梅和しうそ夕まきみ
夏の秋や人氣の足ゆる家か
あつしの秋や時計をまきあつ
あつしの秋やかこの相先はまきむ浪
みしう秋の何よとまきくあつ

夏後

あつしを袖をかきくくまき
何事もおそしうまきく
あつしを袖をかきくくまき
あつしを袖をかきくくまき

墨江の川の傍にあふは言ひし
あつしを袖をかきくくまき
あつしを袖をかきくくまき

あつしを袖をかきくくまき

雜夏之三章

印府教ありて家々曉事おのりて映ひけり
鏡りしをくそ己さかろく委まてし舎つるや
免は悲ひなぬは不為の可未のそそくそ
時早くかあやりのそそくそそそく悔
ちきくそそそそそそそそそそそそそそ
おひいそそそそ

よそふしや夏の集巻のよき序

